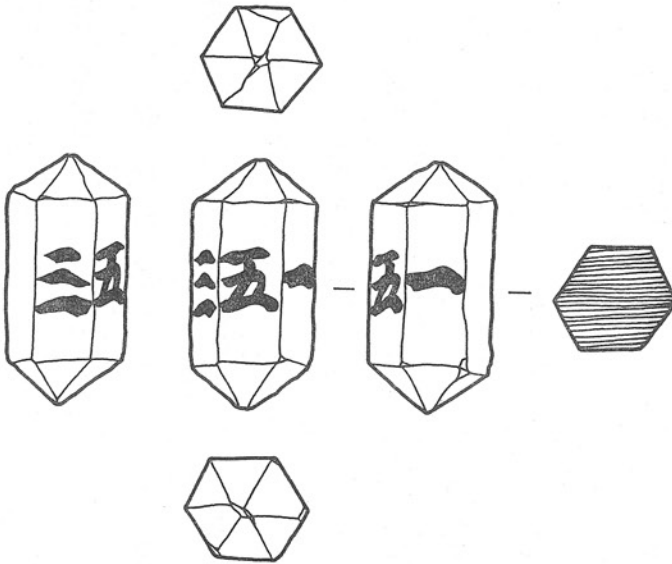


(9)は円盤状の板の破片と見られる。「大録」は八省の大主典にあたる。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』(二九八九年)
(館野和己・西崎卓哉)



木筒(8)実測図

奈良・平城京左京二条四坊二坪

- 1 所在地 奈良市法蓮町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)七月～一〇月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 中井 公・鐘方正樹
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代・鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

当該地は平城京左京二条四坊二坪の北半部にあたり、西は東三坊大路に、東は二・七坪坪境小路に、北は一・二坪坪境小路に接している。検出遺構の大半は奈良時代から平安時代初期までのものだが、平安時代後期から鎌倉時代初期にまで下るものもある。

奈良時代の遺構には、一・二坪坪境小路、掘立柱堀六条、掘立柱建物一九棟、井戸九基があり、重複関係

や配置及び出土遺物などから大きく五時期に区分できる。注目されるのは条坊遺構の存廃をとまなう遺構変遷が確認できたことである。

すなわち、奈良時代前半には、調査地の二坪を含め、敷地が隣接する一・七・八坪におよぶ四町域規模の役所ないしは邸宅が存在した可能性が高い。ついで奈良時代中頃になると、坪境小路を設けて、二坪と北隣の二坪とが別個に使用された一時期がある。その後奈良時代後半には、坪境小路を廃して、再度一・二坪が一体となった二町域規模以上の役所ないしは邸宅の存在を想定することができる。

木簡が出土したのは奈良時代前半の井戸からである。井戸は四町域の敷地内の中心建物群を囲むとみられる塀の外(西)側に掘られており、東西五・〇m、南北四・六mの大きな隅丸方形掘形をもち、深さは二・六mあった。枠は抜取られており、井戸底には木炭が薄く敷かれていた。ほかには土器片が若干出土しただけであった。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「^[美]濃国牟義郡稻朽郷□□里」

・「^[美]濃国牟義郡稻朽郷□□里」 204×(19)×2 031

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』(一九八九年)

(中井 公)

奈良・東大寺大仏殿廻廊西地区

- 1 所在地 奈良市雑司町
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)一月～三月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 中井一夫・松永博明
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

東大寺大仏殿廻廊の西方は、廻廊に沿って幅約二〇mの平坦面が存在する。これは、創建時の廻廊の規模がより大きかったことにも



(奈良)

起因しているのであろうが、これより西は最も大きな部分では約三mの落差をもつ急傾斜となっている。調査は、この平坦面の南端部付近約七〇〇㎡に対して行った。

調査結果は、かつて森蘊氏等によってなされた東大